Catalog 19-#2

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ４/２７までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（バタバタの春）
*先月堀田はりいの新しい本『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』が発売になり、バタバタと過ごしていました。気がつけば、もう４月。バタバタとカタログを作りました。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は６月 10 日までＯＫです。

＊TOP　30　SELLERS(19－#1)＊
1)CLAIRE HASTINGS:Those Who Roam(Scotland)
2)EIMEAR ARKINS:What's Next?(Ireland)
3)TAUTUMEITAS:Tautumeitas(Latvia)
4)FRANDER:Frander(Sweden)
5)FRANKIE GAVIN & ALEC FINN:Traditional Irish Music
　On Fiddle And Bouzouki Volume II(Ireland)
6)KATIE DOHERTY & THE NAVIGATORS:And Then(England)
7)MALFORD MILLIGAN & SOUTHERN ACES
　:Life Will Humble You(USA)
8)MARTYN JOSEPH:Here Comes The Young(UK)
9)JULIE FOWLIS,EAMON DOORLEY,ZOE CONWAY AND JOHN McINTYRE
　:Allt(Ireland,Scotland)
10)JARVENTAUS･DLUZEWSKI:Jorden Svart(Sweden)
11)ROINE/WARG:Bibopalula(Norway)
12)HENSHAW FAMLY & FRIENDS WITH SPECIAL GUEST
　:The Secret Sessions(Ireland)
13)KERRI POWERS:Starseeds(Canada)

14)WARSAW VILLAGE BAND:Masovian Roots Re:action(Poland)
15)KATE FENNER:Middle Voice(USA)
16)SLIM CHANCE:New Cross Road(UK)
17)SUZANNE JARVIE:In The Clear(Canada)
18)THE OTHER YEARS:The Other Years(USA)
19)HANNAH FLOWERS:Amhran Na Cruite(Ireland)
20)BY HECK:A Toast To The 1920's(Ireland)
21)THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell(England)
22)PAUL STEPHENSON:Mother Nature's Rules(UK)
23)REG MEUROSS:Reg Meuross(UK)
24)JESS KLEIN;Back To My Green(USA)
25)LES POULES a COLIN:Morose(Quebec)
26)MAIRE NI CHEILEACHAIR:Ceantar Glas Mhuscrai(Ireland)
27)IONA FYFE;Dark Turn Of Mind(Scotland)
28)NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway(Scotland)
29)BASSEKOU KOUYATE & NGONI BA:Miri(Mali)
30)BALARU:Gravure(Italy)

Re-issue, USA, Canada, British Folk, England, Scotland,Ireland,

USA(Trad), Europe ほか, 古代天皇誕生記

（ジャケ写掲載分が初入荷商品です）

[リイシュー/Historic Recording]
（LP/U．S．A.）
*SHIRLEY COLLINS:The Ballad Of Shirley Collins　¥2990
（限定カラー{桃色}LP 盤。Shirley Collins のドキュメンタリー映画から音楽を寄せ集めた 21 トラック収録の編集盤。2018 作。Earth）

（CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他）



(Silly Wizard)

*SILLY WIZARD:Silly Wizard　B
（1976 年、Andy M.Stewart,Johnny Cunningham,Gordon Jones,Bob Thomas,Freeland Barbour,Alistair Donaldson の六太郎で鮮烈レコード･デビューした Silly Wizard のデビュー作。今聴いても彼らの滋味豊かで麗しく骨太のスコティッシュ･トラッドは感動冷めやらず。どでかいデビュー作だ。1976 年/2019 作。Talking Elephant）
*HEADS,HANDS & FEET:Home From Home　A
（副題"The Missing Album"の Heads,Hands&Feet{Tony Colton,

Albert Lee,Pat Donaldson,B.J.Cole,Jerry Donahue,Ray Smith他}の実質的デビュー･アルバム。録音は1968年の10月～12月。聴くのも販売するのも初めて。いやはや時代のロックというか、音楽は真っ直ぐに米国西海岸ロックを志向したロックで、音楽の若々しさと懐かしい音についニンマリしてしまう。ロックは西海岸ロック志向だが、体現されたロックはほのかに英国的優美さが香っている。本作が皆さんのスタートラインですね。ライナーでは「Heads,Hands&Feetのベスト･アルバムと信じる」と。皆さん、メチャ青春してますね。1968年/2009作。Pukka)

*BERT JANSCH:A Man I'd Rather Be (Part 2) ¥4980

(ハードカバーブック型四枚組ボックスセット。ディスク１は1967年の"Nicola"",ディスク２は1969年の"Birthday Blues",ディスク３は1971年の"Rosemary Lane",ディスク４は1973年の"Moonshine"。ブックレットは英MOJO Magazine誌のライターDave Hendersonによる新たな解説や未使用ジャケット候補など未公開写真など。保存版。2018作。Earth)

[CD/ＵＳＡ]



(George Ensle) (Colin&Luther) (Frank&Dirty)

*GEORGE ENSLE:Home A

(1948年9月生まれというから70歳代になったテキサスのＳＳＷの大御所George Ensleのおよそ10年振りの新作。一つ一つ思い出を思い出すようにギターやレゾネイターギターを弾き語るようにうたうGeorgeの唄の何と心優しく心和むことだろう。過ぎ去ったことすべてが懐かしい思い出の唄になっていて、唄からしみじみ感やほほえみ感がやんわりとにじみ出ている。６歳年上のJerry Jeff Walker翁が春の風景でもながめながら、ゆったりと手作りの思い出の唄をうたった感じだろうか。全曲でMike Rieman{ﾍﾞｰｽ}とDony Wynn{ﾄﾞﾗﾑｽ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}がバックアップしているが、音が優しい。本作はRichard J.Dobsonの霊と仕事に捧げられている。2018作。George Ensle)

*COLIN LINDEN & LUTHER DICKINSON:Amour B

(Blackie & The Rodeo KingsのColin LindenとJim Dickinsonの息子でNorth Mississippi AllstarsのLuther Dickinsonの両南部ロッカーの巨人がタッグを組んで生まれた豊穣南部ロック･アルバム。バックを受け持つTennessee Valentines～Dominic Davis{ﾍﾞｰｽ}, Bryan Owings{ﾄﾞﾗﾑｽ},Fats Kaplin{ｳﾞｧｲｵﾘﾝ､ｱｺ}, Kevin McKendree (keyboards)～は、バッチリ南部ロックを叩き出し、主役の二人はヴェテランの味わいのあるギターで唸らせる。本作は"Amour"、つまりラブソングをテーマにした選曲で、Rachel DavisやRuby AmonfuやSam PalladioやJonathan Jacksonなどがリード･ヴォーカルを取るスタイルを採っていて、ColinとLutherの二人は縁の下の力持ち的な役目に徹している。2019作。Stony

Plain)

*FRANK SOLIVAN & DIRTY KITCHEN
:If You Can't Stand The Heat A

(屈指のマンドリン奏者でシンガーの Frank Solivan 率いる男性四人組 Frank Solivan & Dirty Kitchen の新作は、ブルーグラスを超えて、カントリーロック化した超絶アルバム。彼らの音楽を聴くと、Poco や Eagles や Flying Burrito や Loggins & Messina などが時代の音楽として体現したロックのエッセンスをすべて内包していて、しかもソロ・ヴォーカルもヴォーカル・ハーモニーもサウンドも極めて親密・緻密でキラリ感があって、めちゃ素晴らしい。ジャンルは「ブルーグラス」で売られていて、彼らも「ブルーグラスしてる」と思っているだろうけど、ブルーグラスを几帳面に志向した上で、ブルーグラスの最高級品をめざして誕生した彼らの音は、僕の耳にはカントリーロックの最高級品に聞こえる。非の打ち所なし。ゲスト:Rob Ickes,Peter Rowan。Produced by Frank Solivan & Alison Brown。2019 作。Compass)



(Pierce Pettis)



(Point Quiet)



(Michael Mcdermott)

*PIERCE PETTIS:Father's Son A

(Jack Hardy の"Fast Folk"から SSW として知られるようになった Pierce Pettis の 10 年ぶりの新作。1954 年 4 月 14 日生まれというから、誕生日で 65 歳か。西海岸ロックっぽい一曲目で幕開けする本作は、一曲目のワクワク感からジワリジワリと孤独感漂ういぶし銀の唄の世界へと移っていく。しかしその孤独感は、例えば、Bruce Springsteen が孤独な境地から静かに魂をふるわしてうたっているような気骨ある孤独感で、心に深く響き、不思議と心和むもの。Pierce は Jesse Wiunchester の 1976 年作"A Touch On The Rainy Side"収録の"A Showman's Life"を原曲のイメージを残しながら、腰を据えノスタルジックにうたっている。その歳になって至った静かな境地。w.Gary West,Stuart Duncan,Ruth Moody,Andrea Zonn,etc. 2019 作。Compass)

*POINT QUIET:Walking In The Wild A

(Point Quiet は SSW の Pascal Hallibert 率いるオランダの五人組だが、音楽は一応ルーツロック系だが、シンガーの Pascal のソロ・アルバム的色合いが濃い。オランダのシンガー＆バンドというのは忘れた方が良い。Pascal の唄は実に緩く渋い。Lenard Cohen 風に詩的に練り上げられた唄は、超然とすら感じられもする。そして滋味 豊かな彼の唄は、聴けば聴くほど味わいが深い。究極のスルメ味ＳＳＷアルバムと言っても過言ではない。前に出ない奥行きのある「音」も職人技。名盤の域。2019 作。Continental)

*MICHAEL MCDERMOTT:Orphans A

(ナッシュビルの Collard Green スタジオで録音されたヴェテランＳＳＷの M.Mcdermott の新作。ミュージシャンとしてクレジットされた 10 名の中にはナッシュビル在住のＳＳＷの Will

Kimbrough の名も。録音はナッシュビルだが、音作りはカントリー色の薄い小気味よくノリの良いルーツロックで、ロックの躍動と一体化した Michael 本人の表現力豊かで陰影に富むヴォーカルが実に素晴らしい。自作の唄に悲喜こもごも感があって、感動の幅が広く深い。Elliott Murphy っぽい印象。2019 作。Pure Sky)

*CODY CANADA & THE DEPARTED:3 A

(本作でのバンドの編成は Cody Canada{ヴォーカル、エレキ&アコースティック・ギター他}と Jeremy Plato{ヴォーカル、ベース他}と Eric Hansenheavy{ドラムス}の三人組{元は五人組}ルーツロック・バンドの四枚目でアルバム・タイトルは３。リーダーの Cody Canada の資質はテキサスのレッドネック・シンガーのタイプで、テキサス・スタイルのフォークやルーツロックをベースに南部ロックや西海岸ロックにまで色気を出して、バンドのフォーク～ロックを彩る。どのタイプのナムバーもつぼを得た、かつ聴き親しんだフォークやロックで、ハマッてしまう。Cody の味のある土臭いヴォーカルも良いが彼のゴリゴリのエレキギターは凝った肩をほぐしてくれるような感じで病みつき。ヴェテランの風格だが、フットワークは軽い。2018 作。Blue Rose)

*RICHARD DOBSON:Here In The Garden A

(Townes Van Zandt や Guy Clark と共にテキサスのフォーク・シーンを引っ張ってきた Richard Dobson の六枚目。本作は Richard が 1999 年にドイツをツアーした時に組んだバンドのリーダーの Thomm Jutz をギターと共同プロデューサーに迎えて制作したロッキン・カントリー・スタイルのアルバム。彼の諸作の中で最も唄に勢いが感じられるアルバム。土臭い音も美味しい。2013 作。Brambus)

*J.P. HARRIS:Sometimes Dogs Bark At Nothing A

(アラバマ出身の SSW の本作は「これ、70 年代の SSW アルバムじゃないの？」と耳を疑ってしまう 70 年代のレッドネック・ロックの SSW 風のヴォーカルとビシッとバッチリなやや南部風カントリー・ロックで、嘘みたいに出来過ぎ。J.P. の唄は若かりし頃の Steve Goodman や Jerry Jeff Walker や Guy Clark などの唄を思い起こさせ、エレキ＆ア コースティック・ギター、スティール＆スライドギター、ドラム ス、フィドル、ピアノなどによるバンド・サウンドも、あの時代の音を体現していて、あの時代の SSW の名盤が今に蘇ったかのような SSW ファン歓喜のアルバム。2018 作。Free Dirt←このレーベルははずれがない)

*RYAN MONTBLEAU:Woodstock Sessions A

(マサチューセッツ出身の SSW の R.Nontbleau のウッドストックにある"Applehead"スタジオでのギター弾き語りライヴ。ギターの美しい音色を伴った味のある節回しの唄は、どの唄もぬくもり感があって、じわりじわりと心に響く。昔の Bill Morrissey クラス。2018 作。Woodstock Sessions)

*THE BROTHER BROTHERS:Some People I Know A

(双子の兄弟の Adam & David Moss のデュオ。しばらくこんな感じ～Everly Brothers や Aztec Two-Step のようなほんわかな男性デュオ～の男性二人組のアルバムはなかったような。ジャケットの「飲んだくれ兄弟」のイメージとは真逆の美しいハーモニーとソロによる夢見る純情青春ソングのような初々しい唄が並ぶ。David が爪弾くアコースティック・ギターはピッキングが鮮やか

で初々しく、Adam が奏でるフィドルは愁いがある。おやじデュオながら胸キュン。2018 作。Compass)

*SUGARCANE JANE:Suthernstate Of Mind A

(Sugarcane はアラバマの Anthony & Savana Lee Crawford の夫婦デュオ。ご主人の Anthony は Neil Young や Steve Winwood や Vince Gill などと活動していて、その後 Savana と出逢ってからデュオで活動を始めたという。"Grievous Angel"時代の Gram Parsons & Emmylou Harris 風デュエットで幕を開ける本作は、ホームメイドな 70 年代の西海岸カントリー・ロック風美味サウンドと共にぞっこん。2018 作。Arena)

*CHRIS WALL:No Sweat A

(Jerry Jeff Walker の"Tried & True Music"に所属し、オースティンを拠点に活動していたカントリー/ホンキートンク系 SSW の Chris Wall の 1991 年のアルバム。当時最高レベルの豊穣なテキサス産プログレッシヴ・カントリー・サウンドのもと、気骨ある Chris のヴォーカルによる本作は、それ系 SSW の王道を行く豪快で爽快なアルバム。在庫期間が長い CD なので検盤をしたところ、ディスクとブックレットは新品を保っていますが、ホッチキスがひどくさび付いていて、ものによってはブックレットを綴じきれない可能性があります。廃盤。1991 作。Ryko)

[CD/ＵＳＡ{female}]







(Molly Tuttle) (Lula Wiles) (Onward)

*MOLLY TUTTLE:When You're Ready A

(名フラットピッキング・ギタリストとして評判の若き女性 SSW の Molly Tuttle のデビュー作。本作を聴けば、ギターの名手であることを忘れてしまうほど、彼女の瑞々しいヴォーカルの魅力にハマッてしまう。木漏れ日感のあるうたというか、肌触りのよい唄というか、うたが繊細で浮遊感があって、何とも心地よい。耳を澄まして聴けば、彼女の音楽が米国ルーツロックの豊穣の中から生まれた美しき花であるとがわかる。これほどフレッシュ感が感じられるルーツロック系 SSW アルバムは、あまり聴いたことがない。すべてが完璧。コンサートで共演した Gillian Welch は忘れられない一夜になったと Molly の稀有の才能を大絶賛。2019 作。Compass)

*LULA WILES:What Will We Do A

(Isa Burke{ヴォーカル、ｱｺｰｽﾃｨｯｸ&ｴﾚｷｷﾞﾀｰ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}, Eleanor Buckland{ヴォーカル、ギﾀｰ、ﾌｨﾄﾞﾙ}, Mali Obomsawin{ヴォーカル、ﾍﾞｰｽ}の美人歌姫トリオ "Lula Wiles"の二枚目。トリオを結成するずっと前からメイン州で開かれるフォーク・キャンプで交流していたという彼女等の音楽は、女性ヴォーカル・トリオによるフォーク＆カントリー系の女性ＳＳＷ音楽。シンガーが三人である分、唄に彩りが生まれ、それ自体も魅力的だが、彼女等の年季の入った

阿吽の息の演奏は、フォーク＆カントリーのスタイルで骨太でかつ勢いがあって、歌姫達の年季の入った彩りある唄をしっかりと輝かせている。彼女達の唄自体も聖と俗の幅で味わい深い。トータルに完璧。しかも新鮮。P40 のブックレット付。2019 作。Smithsonian Folkway Recordings)

*ONWARD:Tip Jar A

(Onward は Arianne Kneg{ヴォーカル} と Bart de Win{ヴォーカル、ピアノ、アコ} のオランダ人男女の SSW デュオ。Bart は Iain Matthews や Greg Trooper や Kevin Welch 等との共演経験のある SSW という。テキサスのオースティンで収録された本作は、熟成したテキサス・カントリー・サウンドと、これまた熟成した男女のヴォーカル・ソロ＆ハーモニーに舌鼓を打つ。Bart のヴォーカルはレッドネック系シンガーとして味わい深い味を出し、Arianne のヴォーカルはほんのりと麗しい。二人のヴォーカル・ハーモニーは、心底優しく、テキサス産フォーク/カントリー系 SSW の音楽として熟れた味わいを醸し出している。憧れのテキサス録音で、二人とも夢の中のウキウキさが伝わってくる逸品。何と、あの Lloyd Maines がスティール・ギターでゲスト参加。2018 作。Shine A Light)

*JESS KLEIN:Back To My Green A

(かれこれ 20 年のキャリアのヴェテラン女性 SSW の Jess Klein の新作。彼女現役バリバリだが、本作は音楽的にも精神的にも彼女のルーツ回帰的な内容で、70 年代風ルーツロック・サウンドを伴った心を見つめる素直な唄は、真っ直ぐに心に響く。伴奏は、各種ギターの Jess 以外は Thom Canova{ベース、エレキギター、パーカッション} と Mark Simonsen{ピアノ、エレキギター、ドラムス、グロッケンスピール他} の二人のみ。この二人のロックの素朴さやストレートさが逆に功を奏していて、身体に美味しいし、Jess の初心のヴォーカルといい、初期の Linda Ronstadt のような雰囲気が感じられるものになっている。2018 作。Blue Rose)

*ALELA DIANE:The Pirate's Gospel(Deluxe Edition) ¥2390

(Alela Diane の 2006 年のデビュー作に未発表音源曲 10 曲を加えて、新たに二枚組で発売されたデラックス版。Alena は音楽家の両親のもと、カリフォルニアの深い森の家で両親からフォークソングを習ったという。本作は過去と未来や人生、死、誕生などについて思索した自作の唄を父親のスタジオで録音したもので、唄もギターの伴奏もいたって素朴ながら、唄の味わいはどのフォーク系シンガーよりも深いと思えるほど深い。個人的な印象だが、Karen Dalton が淡々とギターを爪弾きうたった感じで、感情を押し殺したような、投げやりにも感じられる彼女の唄は、心に深く響く。名盤中の名盤。2006/2018 作。Rusted Blue)

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]



(Steve Polts)

*STEVE POLTZ:Shine On A
（この Steve Poltz という初耳のノヴァスコシア出身の SSW の新作のめちゃカッコイイよくって、ホロリ＆ニッコリなこと！録音はナッシュビルで、メムバーはヴォーカル＆ギターの S.Poltz とドラムスの Bryan Owing とギター、ベース、効果音の Will Kimbrough のたったの三人。このこぢんまりしたユニットから創り出される音楽は、70 年代のアメリカン･ロックのスタイルの美味しいポイントをシンプルにかつ絶妙に駆使して、ユーモアとペイソスのある Steve の唄をバッチリ援護していて、かつて SSW や米国ロックの名作などで聴いたことのあるような味のある一曲一曲に舌鼓を打つ。二曲目の"Pharmacist"などはディランの「天国への扉」とザ･バンドの「ウェイト」を混ぜたような感触。身体喜ぶ名品。2019 作。Red House）
*AD VANDERVEEN:I Was Hank Williams A
（かつて Iain Matthews、Eliza Gilkyson とトリオで"More Than A Song"を発表したことのあるカナダ系ドイツ人 SSW の Ad Vanderveen の新作は、フォーク･シンガー/SSW としての原点に帰るうたうことに真っ直ぐなアルバム。ギターの弾き語り のみならず、適度にロック的な音作りがなされたナムバーやホーンや女性ハーモニーが入るナムバーもあるが、いぶし銀の唄の味わいは、SSW アルバムとして円熟度を極めていて、アルバムを通して渋く感動的。名盤誕生。Blue Rose）
*HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA:Angels In The Snow A
（オランダのヴェテラン･アメリカン･ロック･バンドの Hidden Agenda Deluxe がカナダの女性 SSW の Oh Susanna をメムバーに招いて制作したクリスマス･アルバム。The Band の"Island"収録の "Xmas Must Be Tonight"で The Band 風いぶし銀ロックで幕開けする本作は、いぶし銀アメリカン･ロックから SSW 風そして Oh Susanna のヴォーカルをフィーチャーした女性 SSW 風と聴かせ所色々で、しかも一曲一曲の完成度が高く、味わいが深い。彼らの熟達したロックも聴き惚れるが、バンドのヴォーカルを担う BJ Baartmans と Eric Devries は SSW としても凄い魅力。それに Oh Susanna が花を添える。2018 作。 Continental）

[CD/UK, IRELAND]



(Chas & Dave)



(Bobby Long)



(Marion McEvoy)

*CHAS & DAVE:The Other Side B
（4/10 入荷予定。ネットで聴いた Chas Hodges{昨年９月に他界}と Dave Peacock のコンビ"Chas & Dave"の新作は、二人のルーツ回帰の南部ロック風ゆるゆるのロック。最後に良き音盤を作ってくれました。全 21 曲。2019 作。Edsel）
*BOBBY LONG:Sultans A
（プロデュースによる南部風のふくよかなルーツロック･タイプの

名盤"Ode To Thinking"から待つこと 4 年。米国を拠点に活動する英国人 SSW の Bobby Long の待望の新作。自身のバンド･メムバーでもある Bobby Dawson をプロデューサーに迎え、ニューヨークの地理学センターのスタジオでで収録された本作は、英国人 SSW 的感性とニューヨークの都会的な空気感が心地よく感応し合った、例えば、初期 Elliott Murphy の音楽に通じる音楽を創作していて、すこぶる魅力的。自身のバンドによる一体感のあるロックは、ビシッとタイトかつ英国情緒な彩り感も放っている。前作とは趣を異にはするが、ヴォーカルもサウンドも 70 年代 SSW の匂いプンプン。稀有の SSW。2019 作。Compass)

*MARION McEVOY:Broadstone Belle C

(Imrama というアイリッシュ･トラッド･バンドのメムバーで、女性ＳＳＷの Marion McEvoy のソロ。本作はほんのりとアイリッシュの香りの漂うほんのりとしたＳＳＷアルバム。そのほんのりさは 1839 年 1 月 6 日の夜にアイルランドを襲ったハリケーンの唄でも同じ。レコーディング･スタジオの仕事もしている彼女の友達の輪は大きく、本作に参加したミュージシャンは Mary Begley{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ}や Martin Nolan{ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ}など全 16 名。Eleanor McEvoy{ﾌｨﾄﾞﾙ}の名もあるが、ＳＳＷの Eleanor ではなく、同名異人と思われる。彼女の唄は家族や身の回りで起こったことを思い出のアルバム写真を眺めるように優しく包むようにうたった唄が中心で、聴いていて心落ち着くもの。CD-R 仕様。MarionMcEvoy)

*THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell B

(ノーサンバーランドの James と Sam の Gillespie 兄弟の二枚目に当たる新作。初めて聴く二人のフォーク、兄弟のソロ･ヴォーカルとデュエットと渋いフィドルとギターが織りなすフォークは渋く麗しくかつ愛おしいフォーク。兄弟の穏やかで英国的に愁いのあるハーモニーはそこはかとなく美しい。影響を受けたシンガーとして Dick Gaughan,Anne Briggs,Leonard Cohen,Kathryn Tickell などの名を挙げている。四曲目収録の"Tina's Song"は強くブリティッシュ･トラッドな曲として味わい深い。稀有な名品。2018 作。The Brothers Gillespie)

*MARTYN JOSEPH:Here Comes The Young B

(Martyn Joseph の新作。Martyn の唄は元々内省的な深みのある唄が持ち味だが、本作ではそうした本質を保ちつつ、唄がポジティヴで外へと向かっている。これほど心の奥底から沸き立つような、しかしそのひと言ひと言は思索的で、重みと深みを伴っている SSW アルバムはあまり記憶にない。Lisa Knapp や Tom Robinson のプロデューサーで、マルチ楽器演奏家の Gerry Diver の激情と癒やしのある音作りが見事で、Martyn の唄に宿る魂を輝かせている。SSW ファン、目が覚めるよ。2018 作。Beste! Unterhaltung)

*MARTYN JOSEPH:Full Colour Black And White a

(Martyn Joseph との付き合いは本作から始まった。闇の中から聞こえてくるような Martyn の純な唄達が心に響く。長期間の在庫品で中古～ほぼ新品のコンディション。1996 作。Grapevine)

*PAUL STEPHENSON:Mother Nature's Rules D

(ハイブリッド SACD。英国人の SSW の Paul Stephenson の新作。Paul の唄は James Taylor が英国のカントリーサイドで悠々自適の生活を送り、良き隣人達と人生を楽しむかのような穏やかで心和む唄。そんな唄も魅力的だが、彼が奏でるアコースティック･ギター

のマジカルな響きも凄く魅力的。アコースティックな高音質にこだわる Stockfisch らしい音響創りがより彼のギター･サウンドの魅力を引き出し、唄と音楽の鮮度を上げる効果をもたらしている。ケルティック･ギター名手の Ian Melrose のギターも隠し味的に効果を上げてもいる。Lea Morris のバッキング･ヴォーカルが心和ませる。2018 作。Stockfisch)

*REG MEUROSS:Reg Meuross D

(ハイブリッド SACD。もう何枚もソロ･アルバムを発表していて、ヒューマニティーある彼の唄はフォークフェスなどで人気の SSW という。以前のアルバムには Karen Tweed や Phil Beer や Jackie Oates なども参加したという。その Reg Meuross の新譜。初めて聴く Reg の唄は｢何て心優しいの！｣。メロディはソフトでヴォーカルは深呼吸をするように落ち着きが深い。ここでも Stockfisch のワンランク上を行くアコースティック･サウンドが見事で、夢見心地な Reg の唄を本当に夢見心地にしている。おそらく彼のアルバムでこれほど美しいアルバムはないのでは？！2018 作。Stockfisch)

*MIKE SILVER:How Many Rivers A

(英国の叙情派 SSW と言えば Ralph McTell に Johnny Coppin そして Mike Silver。Mike の英国的叙情性豊か唄は最高潮。w.J.Coppin, R,McTell,Jo Partridge,Martyn Wyndham-Read,Phil Beer,Julie Silver,Roger Nichols,Mick Dolan,etc. 2008 作。Faymus)

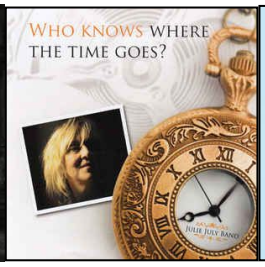
*LISA KNAPP:Till April Is Dead - A Garland of May B

(春眠暁を覚えず。川のせせらぎの音や鳥の鳴き声や鳩時計の時報を知らせる音や奏法の枠を超えた愉快な各種楽器の音などが鳴り響く中、Lisa は春の夢の中で遊ぶ少女のように春向けの伝統歌を口ずさむ。奇跡の一枚。全 12 曲。2017 作。Ear To The Ground)

[CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]



(Kathryn Tickell)



(Julie July Band)



(Ruth&Sam)

*KATHRYN TICKELL & THE DARKENING:Hollowbone C

(4/10 入荷予定。ネットで聴いてぶっ飛び。凄い意欲作に感じた。"Hollowbone is a wonderful,brave, and intoxicating album"とは Folk Radio。大いに楽しみ。2019 作。Magnetic North East)

*JULIE JULY BAND:Knows Where The Time Goes C

(Sandy Denny ファン必殺の Sandy Denny ソング 11 曲と Richard Farina 作で Fairport の"Liege & Lief"収録の"Quiet Joys Of Brotherhood"の全 12 曲収録の Julie July Band のアルバム。やはり曲の魅力は大きい。Julie のシンギングは Sandy Denny っぽくも清々しさが感じられるもので、聴きしんだ曲に懐かしさを覚えつつ、その清々しさがむしろ新たな魅力を生んでいる。バックを務める Steve Rezillo{ｴﾚｷ･ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ},Nick Smith{ｷﾞﾀｰ}, Don Mac{ｷﾞﾀｰ},Blake Probert{ﾍﾞｰｽ},Garry Low{ﾄﾞﾗﾑｽ},Martin

Emeny{ﾄﾞﾗﾑｽ},Georgina Groom{ﾌｨﾄﾞﾙ},Chris Hutchison{ﾋﾟｱﾉ}
等による演奏も小気味よいフォーク･ロックで、何とも清々しい。
懐かしくも清々しい快作だ。2018 作。Aurora Folk)
*RUTH NOTMAN & SAM KELLY:Changeable Heart B
(何と 10 年振りの Ruth Notman の三枚目に当たる新作。今回はア
イルランド系英国人シンガーでマルチ楽器奏者の Sam Kelly と
のデュオ･アルバム。仕掛け人は Kate Rusby のご主人で、本作の
プロデューサーの Damien O'Kane。二人に望んだのはおそらく、
フォークやトラッドの名曲それ自体が持つプリミティヴな味わ
いを壊さずに、素朴にうたうこと。そう言う視点から聴くと、
Ruth の 2007 年のデビュー作"Thread"と通じる音楽性を保持して
いて、ある意味"Thread"の延長線上の男女のデュエット版とし
て結実している。二人の素朴なシンギングは、名曲本来の味わい
を味わわせてくれる。良き二人のシンガーによる良き唄だ。
w.Damien O'Kane{各種ｷﾞﾀｰ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Josh Clark{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ他},
Anthony Davis{ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ他},Ross Ainslie{ﾎｲｯｽﾙ}。2019 作。Pure)
*MARTIN & ELIZA CARTHY:Live At The Pavilion D
(Martin & Eliza 父娘による 2018 年２月のライヴで CD と DVD のセッ
ト。会場はデカイがまるでホームコンサートのようなぬくもり感
のあるライヴだ。全 12 曲。Eliza の貫禄は、CD の DVD 版でご確認下さ
い。2018 作。Under The Bed)
*BOB AND GILL BERRY:Echoes Of Alfredy B
(｢暖炉のそばでうたって楽しむ｣イメージで制作されたという Bob
& Gill 夫妻の新作は、オックスフォードシャーのフォークソング
収集家の Alfred Williams{1877-1930}が収集した民謡を中心に
演唱したアルバムで、二人のシンギングといい、二人やゲストに
よるモリス･ダンス風音楽、それに土臭い英国トラッド･サウンド
といい、イングランドのオーセンティックなトラッドの味わいと
楽しさが自然体で溢れたもの。本作から夫妻のイングランド民謡
を愛し、慈しむ心がやんわりと伝わってくる。終始｢暖炉｣の温か
さ。英国トラッドの豊かさがわかる全 16 曲。2018 作。WildGoose)
*MISCHIEF AFOOT:Mischief Afoot B
(コッツウォルズを拠点に活動する Mischief Afoot は、Becky
Dellow{ﾌｨﾄﾞﾙ},John Davis{ﾘｺｰﾀﾞｰ、ﾊﾞｳﾛﾝ},Jeff Gillett{ｳﾞｫｰｶ
ﾙ、ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞｰﾗ、ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ、}のトリオ。選曲はイングランド、アイ
ルランド、スコットランドのトラッドやその関係のミュージシャ
ンの曲。彼らの手にかかれば、アイリッシュであろうとイングリ
ジャケ写のように悪がしっこい妖精になって？楽しむトラッド
が楽しい。全 14 曲。2018 作。WildGoose)
*BOB FOX & JOHN TAMS:A Garland For Joey B
(副題"The War Horse Songbook"。｢ウォー・ホース～戦火の馬～｣
は、1982 年に出版されたマイケル・モーパーゴによる児童小説を
舞台化した演劇で、スティーヴン･スピルバーグ監督により映画
化もされているが、本作は演劇のために John Tams がトラッドの
スタイルで作詞作曲した唄の中からハイライトの唄を Bob Fox が
ギターの弾き語りでうたったアルバム。驚くのは、Bob Fox の 60 歳
半ばを過ぎてもなお、70～80 年代に Stu Luckley とのデュオで味
わわせた英国トラッド調に毅然として、円やかにコブシの利いた
シンギングと、ドキッとするほど、70 年代英国トラッドの空気に
充ちたきららかなギターの音色を発していて、味わい深い。全 12

曲。2017 作。Fledg'ling)

[CD/ＷＡＬＥＳ]



(Siân James)

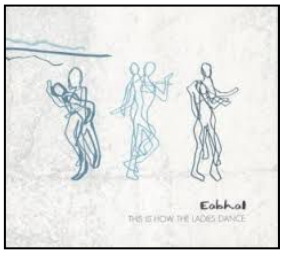
*SIAN JAMES:Gosteg C

(ウエールズを代表するヴェテラン･トラッド･シンガーの Siân James の 10 枚目に当たる新作。本作は賛美歌やスピリチュアルな詩を主にトラッドのメロディーに載せて、自身のハープ、ピアノ、ギターの弾き語りを中心に、心静かにウエールズ語でうたったアルバムで、彼女のどの珠玉のアルバムよりも唄の清らかさが深い。おそらく唄に身を捧げる気持ちがあってのことだろう。まるで時が止まってしまうと思ってしまうほどに唄の深さが深い。余程、ノドのケアに努めているのか、現在 59 歳とは思えないほど、声が信じられないほど美しく、またウエールズ語の響きが快い。終始夢の中。名盤完成。w.Oliver Wilson-Dickson{ﾌｨﾄﾞﾙ},Wyn Pearson{ｷﾞﾀｰ},Robin Hames{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ}。2018 作。Bos)

*BLODAU GWYLLTION:Llifo Fel Oed B

(Blodau Gwyllion は小説家で女性 SSW の Manon Steffan Ros とギター奏者の Elwyn Williams の二人組。全曲ウエールズ語で、母親がうたっていたというトラッド曲一曲以外は全曲 Manon の自作曲。赤子を寝かせ付けるようにそっと優しくうたう Manon の唄も、Elwyn の繊細で穏やかなアコースティック･ギターの響きも、この世の物とは思えない穏やかで普遍性が感じられる響きがあって、ほんわかと心和んでしまう不思議に心地よい音楽。唄は川や海や湖や水をテーマにした唄が多い。Manon の父親の Steve Eaves は、Sutherland Brothers や Al Stewart とも共演経験のある SSW らしい。2018 作。Gwymon)

[CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ]



(Eabhal)

*EABHAL:This Is How The Ladies Dance B

(アウター･ヘブリディーズ諸島のサウス･ウイスト島を拠点に活動する若きスコティッシュ･トラッド･バンドの清々しいデビュー作。メムバーはリード･ヴォーカルの Kaitlin Ross にアコの Megan MacDonald、フィドルの Jamie MacDonald、ギターの Nicky Kirk、バグパイプ＆笛の Hamish Hepburn の二姫三太郎。メムバー

写真を見れば、普通の若者。しかし彼らが創作するスコティッシュは、とびっきりのスコティッシュ。マウスミュージックを含むKaitlinのシンギングは、もうこれは幼い頃から民謡に親しんできた者にしか出せない細やかな表現力を自然に身につけたシンギング。それは彼らが生み出す音楽にも言えることで、子どもの頃から楽器をおもちゃのように親しんで育ったように、音楽がすっかり自分の物となっていて、各ミュージシャンが奏でるスコティッシュ・サウンドが自由で何と清々しく新鮮なこと！シンギングもサウンドもまばゆい。2019作。Eabhal)

*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway B

(Northern Flywayはシェトランド生まれのシンガーでマルチ楽器演奏家のInge ThomsonとシンガーでSSWで鳥類生物学者のJenny SturgeonとSSWでマルチ楽器演奏家の三人の女性アーティストをフィーチャーした鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込んだ本作は、同じレーベルから発売されたKarine Polwart{Inge ThomsonはK.Polwart Bandのメムバー}の自然環境保護への思いを込めた"A Pocket Of Wind Resistance"と通底する夢のように清々しいフォーク・アルバム。彼女等の音楽が素晴らしいのは、シンガー自身の心が鳥になっていて、シンギングは風に乗って飛翔し、それらのシンギングはフォークのスタイルであること。類い稀な美しいフォークとして傑出している。部屋の空気も清々しく一変する。2018作。Hudson)

*IONA FYFE:Dark Turn Of Mind ¥1590

(Lizzie HigginsやJeannie Robertsonなどのアバディーンシャーのリヴァイヴァル・シンガーに影響を受けたというアバディーンシャーの若き歌姫Ionaの本作は６曲収録ミニアルバム。Ionaがうたえばどんな唄{バラッド}も初々しく輝く。今、彼女ほどに古謡{バラッド}を春の爽やかな風のような肌触り感でうたえるシンガーはいないのでは。Aidan Moodie{ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ},Graham Rorie{ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ},Rory Matheson{ﾋﾟｱﾉ}による細やかな伴奏も抜群。極めつけは、最後に収められた南アパラチア民謡で"Matty Groves"と比較されることの多い"Little Musgrave"。この一曲が本作の価値を一層高めている。2019作。Cairnie)

*TRAIL WEST:From The Sea To The City B

(四太郎から六太郎編成になったグラスゴーのフォーク・ロック・バンドの"Trail West"の新作で三枚目。荒武者のようなIan Smithのヴォーカルはそれだけで希少価値だが、今のご時世、スコットランドのミュージシャンの演奏力の底上げが凄く、アコ、ホイッスル、ハイランド・バグパイプやアコースティック・ギターなどによるスコティッシュ・トラッド風味満点な音楽は、潔いロック・サウンドと合体して、ワンランク上の独自の血湧き肉躍るおやじスコティッシュ・フォーク・ロックを体現している。2018作。TW)

*KARINE POLWART:A Pocket of Wind Resistance B

(元Malinkyのヴォーカルで、スコットランドを代表する女性フォーク・シンガーのK.Polwartの2017年作。本作は毎年9月にアイスランドやグリーンランドの海食崖からスコットランドのフォース湾を通ってファラ・フロー・ロック湖に渡ってくる雁の群れへの思いを中心に自然環境保護への思いを唄にしたもの。美しく、夢のような音楽。2017作。Hudson)

*ALASTAIR MacDOUGALL WITH PAUL ANDERSON:Trees May Bud　B
（A.MacDougall は 1990 年代はじめから活動するというヴェテラン・フォーク・シンガー＆ギター奏者が名スコティッシュ・フィドル奏者の P.Anderson と組んだ本作。全 12 曲中４曲がトラッド曲に Archie Fisher や Tom Paxton や Darrell Scott 等のフォーク系の唄をうたったもので、それぞれの唄を愛しむようにうたう彼の唄はトラッド・シンガーというよりは、心優しい SSW 風で、気分ほっこりになる。"Songs"という副題を付けたくなるような唄があったかく感じられるアルバムだ。2018 作。Laural）
*LAUREN MacCOLL:The Seer　B
（スコットランド屈指のフィドル奏者の Lauren MacColl の本作は、17 世紀に生きたとされるスコットランドの予言者ブラハン・シーアの人生と予言に Lauren がインスパイヤーされて創ったもの。Lauren は子どもの頃に本で読んで抱いた不思議さをそのままスコティッシュ・トラッドのスタイルで、かつピリピリっとスピリット高く、精霊たちが棲む不思議な森に分け入るような不思議な音楽を創作していて、奥が深い。2017 作。Fais Rois）

［CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系］
デジパック・タイプを含め、元々開封されているものが多数あります。







（Flook）　（Grainne Holland）　（Backwest）

*FLOOK:Ancora　B
（2008 年に音楽の方向性や家族が出来たことなどからバンド活動を停止していた Brian Finnegan,Sarah Allen,Ed Boyd,John Joe Kelly の Flook が春に一回り大きくなって戻ってきた。僕が抱く彼らのアイリッシュは爽風のイメージだが、本作のイメージは春の日射しの中で幾重にもなって舞い踊る爽風。この爽風サウンドは Flook ならではのサウンドだが、本作では各メムバーのこの約 10 年の間の活動経験を反映し、例えばアストゥリアスのパンデレータ{タムバリン}奏者がゲスト参加したり、アストゥリアスのハーディーガーディ奏者の曲なども演奏していて、北スペイン・ケルト音楽風な味わいが加味されてもいる。それらの試みはむしろ Flook の爽風サウンドの彩りを多彩にする効果をもたらしていて、Flook の再出発に相応しい目出度い彩りに感じられもする。Flook サウンドは不滅。2019 作。Flatfish）
*GRAINNE HOLLAND:Corcra　C
（ベルファスト出身の女性アイリッシュ・シンガーの Gráinne Holland の新作で三枚目。全曲自作曲で大半の曲がゲール語の歌詞。プロデューサーを Flook の Brian Finnegan に迎え、Sean Og Graham,John Joe Kelly,Liam Bradley,Aidan O'Rourke,Cormac MacCarthy,Niamh Dunne 他の敏腕アイリッシュ＆スコティッシュ・ミュージシャン達の強力演奏のもと制作された本作は、Flook 流アイリッシュ

のそよ吹く風サウンドに乗ってシンギングするGrainneの唄は、ゲール語の唄でありながらも、Mary Blackがうたうアイリッシュ・ソングのような輝きと親しみが感じられるもの。それはGrainne自身が体験したり、感じたこと{子どもの誕生や小鳥の死や故郷との別れや冬の寂しさや父の死等}を唄にしてうたっていることに大きく起因していると思われ、言葉の壁を超えて、心に響く。そうした唄にFlook流の清潔感ある、ある種ハイブリッドなアイリッシュ・サウンドが見事に効果的。もう泣けて泣けて仕方がない。2019作。Grainne Holland)

*BACKWEST:Heritage Hall C

(ゴールウェイを拠点に活動するBackwest～Maureen{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｳﾞｫｰｶﾙ} & Brendan{ｱｺ} Browne兄妹にFabian Joyce{ｷﾞﾀｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}とLord Of The DanceのPeter Vickers{ﾊﾞｳﾛﾝ他}～の新作。Maureen & Brendan兄妹によるフィドルとアコのコラボを音楽のコアにして、ギターとバウロンが共演＆競演＆饗宴する仕掛けのアイリッシュだが、兄妹のフィドルとアコの変幻自在なジャンプ力ある演奏は神業レベルで、二人の阿吽のコラボを聴いているだけで、身体が熱くなってくる。神業レベルだから、スローな曲にもアイリッシュ魂が宿っている。おまけにFabian Joyceのシンギングは心にグサっ{もっとうたって欲しい！}。百戦錬磨の腕前のアイリッシュ。今年はCeltic Connectionsにも招待されて、大人気だったとか。2018作。Backwest Music)







(Liz&Jake) (String Sisters) (Caoimhin&Paddy)

*LIZ CARROLL･JAKE CHARRON:Half Day Road B

(Liz Carrollの新作はカナダのケルティック・トリオのEast Pointers{2017年Juno賞受賞}のメムバーで、ギター＆ピアノ奏者のJake Charron。アイリッシュ・フィドラーのZoë Conwayに捧げた３曲のメドレー曲で幕開けする本作は、これぞLiz Carroll！と声を上げてしまう気力に充ちた絶品のアイリッシュ・フィドル。この衰えを知らぬ底力ある演奏はもの凄い。Lizの野望は、ギターでもピアノでもアイリッシュが弾ける新進気鋭のミュージシャンとのコラボ。もうバッチリとバックアップしてくれる相方と巡り会えて、Lizのアイリッシュはさらにレベルアップ。Lizのアイリッシュ・フィドルはいつも旬。ゲスト:Joannie Madden。2019作。Liz Carroll and Jake Charron)

*STRING SISTERS:Between Wind And Water B

(Mairéad Ní Mhaonaigh{Altan},Liz Carroll,Liz Knowles,Catriona Macdonald{Blazin' Fiddles},Annbjørg Lien,Emma Härdelin{Garmana,Triakel}のアイルランド、北米、スコットランド、北欧のトラッド・シーンを代表するフィドル・グループ"String Sisters"の二枚目。録音はエディンバラのCastlesound。各ミュージシャン＆シンガーが自身のレパートリー曲を演奏し、他のミュージシャンが音を合わせて演奏するスタイルで、それぞれの音楽

の地域性と音楽性がキープされている一方で、Mairéad がうたう自作曲の"Mo Nion O"{愛娘 Nia のために作った子守唄}などは、モダンなしっとりとした曲調でうたわれていて、Altan スタイルではないシンギングが味わえる。凄いのは各ミュージシャンがお互いの音楽性を知った上で、ハイレベルな音楽性をキープし、ケルティックでノルディックな彩りと勢いのある音楽を創作していること。w.Tore Bruvoll, Dave Milligan,James Mackintosh,Conrad Molleson。2018 作。String Sisters)

*STRING SISTERS:Live(一枚目。2007 作。Heilo) B

*CAOIMHIN Ó FEARGHAILL & PADDY TUTTY:Fiddle & Flute C

(ウォーターフォードから若きフィドル奏者とフルート奏者のコラボ・アルバム。2012 年に"TG4 Young Musician of the Year"賞受賞し、2013 年にトリオで"Lá ag Ól Uisce"という素晴らしいアルバムを出している Caoimhin とフィドル製作者でフィドル奏者の Paddy のコラボは、ひと言で言えば、フレッシュ。それは春を迎えてはしゃぐ鳥たちのように二人がフルートとフィドルで織り成す音楽は、生き生きとして清々しく爽やか。ただただ聴いているだけで、幸せ気分。John Carty の"Congrats Paddy and Caoimhin on such a fresh respectful approach to our traditional music"の言葉が二人の音楽をうまく表現している。2018 作。Paddy Tutty)





(Eileen Gannon) (Gloaming)

*EILEEN GANNON:The Glory Days Are Over B

(アイリッシュハープ奏者 Eileen Gannon の本作は、余計な飾りっ気のないすっぴんのアイリッシュハープ・ソロ。アイルランドの「フラキョー」をはじめ数々のハープ・コンテストで賞を受賞という彼女のハープ演奏は、いやはや生真面目というか、精緻というか、魔法の指と思ってしまうくらい、様々な、どんなリズムのアイリッシュ・ダンス曲をも見事に弾きこなす。最高レベルの模範演奏。音楽そのものも新鮮だが、ほとんどの曲があまり馴染みのない曲ということも耳に新鮮。ラストは美しいスローエアーで幕。13 トラックの 24 曲。2018 作。Eileen Gannon)

*THE GLOAMING:3 C

(シャンノース・シンガーの Iarla Ó Lionáird に Martin Hayes, Dennis Cahill,Caoimhín Ó Raghallaigh のアイリッシュ勢にアメリカ人ピアニストの Thomas Bartlett の五人組 Gloaming の三枚目。基本的に前二作の延長線上の Martin Hayes & Dennis Cahill のアイリッシュと Iarla の優美なシャーンノース・シンギングを素材に伝統的アイリッシュの桃源郷的心地よさをメムバーの一員で異色の若手プロデューサーの Thomas Bartlett が追求し、創作したある意味究極の美しいアイリッシュ。Martin & Dennis の演奏は普段通り。2019 作。Real World)

*FRANKIE GAVIN & DE DANNAN:Jigs & Jazz II B

(F.Gavin&A.Finnの約40年振りの二枚目で再びメル友になった F.Gavinのマネージャーからの情報で知った2013年、F.Gavin率いるDe Dannan{Michelle Lally,Barry Brady,Paul O'Driscoll, Colm Ó Caoimh}が1924年に建てられたドニゴールのバー"McGrory's"で行ったライヴ。F.Gavinのニューグループ"By Heck"でもそうだし、過去の音楽もそうだが、彼の20世紀前半の米国アイリッシュ・ミュージック黄金期のアイリッシュへの思いは並々ならなくて、Paddy KilloranやMichael Coleman等の当時のスーパー・ミュージシャン達のレパートリー等をガンガン演奏しまくり、かつシンガーのMichelle Lally嬢がノスタルジックなシンギングで時代の空気感を生み出している。Frankieのフィドルのノリが圧巻で、文句なしに楽しめるアイリッシュ。2013/2019作。Frankie Gavin & De Dannan)

*BY HECK:A Toast To The 1920's C

(1911年にニューヨークに移住し、米国でのアイリッシュ・ミュージック黄金期の先導役を果たしたMick,Joe&LouisのFlanagan兄弟の初録音が1921年。本作はBy Heck～Frankie Gavin{ﾌｨﾄﾞﾙ},Martin Murray{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Emma Corbett{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ},Carl Hession{ﾋﾟｱﾉ}～を名乗るアイリッシュの三人のツワモノ達＋Flanagan兄弟の故郷出身の女性メローディオン奏者の一姫三太郎がFlanagan兄弟に捧げたアルバム。Flanagan兄弟の音楽自体が大衆受けするノリ抜群のアイリッシュだが、彼らは兄弟達のレトロだが、ビンビン躍動するアイリッシュのスタイルをベースにしつつ、超絶な演奏で音楽をブラッシュアップする。メチャ凄い。特にFrankie Gavinのフィドルは今が旬と思ってしまうほど。おそらく天国のFlanagan兄弟はBy Heckの音楽に合わせ、「奴ら最高！」とセッションを楽しんでいるに違いない。2018作。By Heck)

*FRANKIE GAVIN & ALEC FINN:Traditional Irish Music On Fiddle And Bouzouki Volume II A

(Alec Finnが天国に行く二ヶ月前に収録されていたF.Gavin&A.Finnの約40年振りの二枚目。全13曲。ゲストBrian Bourke{ﾊﾞｳﾛﾝ}。LP形式スリムジャケット・CD-R仕様。2018作。Frankie Gavin)

*HENSHAW FAMLY & FRIENDS WITH SPECIAL GUEST :The Secret Sessions C

(Sharon Shannonがアイルランドのラグビー・チーム「レンスター」の人気選手ロビー・ヘンショウと彼の家族＆友人と行った特別なセッション・アルバム。ヘンショウー家はアスローン{ダブリンとゴールウェイのほぼ中間にある町}の伝統音楽を長年にわたって演奏している家系で、ロビー・ヘンショウの祖父のビリーはバンド活動をしていたという。全曲でSharon Shannonがセッションに参加し、開放的で和気あいあいとしたセッションの雰囲気を保ちつつ、大半の曲で先頭に立つ演奏で、旋風を巻き起こしている。アイリッシュの底力。本作の売上げはアスローンのSouth Westmeath Hospiceに寄付されることになっている。2018作。Ceol Music)

*HANNAH FLOWERS:Amhran Na Cruite C

(米国ミネソタ出身のゲーリック・シンガーでハープ奏者のデビュー作。全曲ハープの弾き語りによるゲーリック・ソング集。彼女のアイルランドの伝統歌へのアプローチは、音楽性もそうだが、カナダのLoreena McKennittがケルト音楽に向かう姿勢に似ている。

Hannah はゲーリック・ソングの持つ不思議さや優美な響きをガラス細工のような美しく輝きのあるシンギングで引き立たせ、輝かせる。「シンギング・ウィズ・ハープ」の弾き語りの素朴さが音楽の純粋さと質とを高めている。ゲスト:Dáithí Sproule{ｷﾞﾀｰ},Cory Froehlich{ﾌﾙｰﾄ、ﾎｲｯｽﾙ},Danielle Enblom{ﾌｨﾄﾞﾙ、ﾀﾞﾝｽ}。ケルティックな夢見心地保証。全 12 曲。2018 作。Hannah Flowers)

*EIMEAR ARKINS:What's Next? B

(オールアイルランドのタイトル 10 個獲得という女性ゲーリック・シンガーでフィドル奏者で教師の Eimear Arkins のずば抜けて素晴らしいゲーリック・シンギング＆アイリッシュ・フィドル・アルバム。そのシンギングは 70 年代の英国の良きトラッド・シンガーが保持していた荒野に咲く一輪の花のような孤高の美しさ。2018 作。Eimear Arkins)

*GIRO:At The Ceili B

(アイルランドのゴールウェイで結成されたデンマーク人、ニュージーランド人、カナダ人そして紅一点日本人の一姫三太郎の四人組。本作は Giro のアコーディオン奏者の Anders Trabjerg のもう一つのユニットの Great Danes 路線の古き良きアイリッシュ。彼らが創作するのは 20 世紀はじめ頃のアイリッシュ・ケーリー・ミュージック。レコードの回転スピードを早回ししたかのようなノリ抜群のダンス曲のオンパレードはチャップリンの映画を観るようなレトロ感と面白さと人情味のあるハッピーな音楽。アイルランド人に大受け間違いない。ゲストで Toyota Ceili Band の Yuri Kitagawa さんがケーリードラムで参加。。2018 作。GIRO)

*GIRO:Galway International Retro Orchestra B

(彼らが目指す音楽は 20 世紀はじめ頃の雰囲気の音楽。アイリッシュもジプシーもクレズマーも北欧も「20 世紀はじめ頃の雰囲気」をそれ風のレトロなサウンドで創作していて、ユニークだし、全体を通して、コミカルだったり、ホロリとさせられたり、音楽に人情味が感じられて、心はずっと笑顔。2014 作。GIRO)

*THE GREAT DANES:In Ireland B

(GIRO の Anders Trabjerg{アコ}と Jonas Fromseier{バンジョー}の二人のデンマーク人アイリッシュ演奏家による本作は、古いスタイルのアイリッシュ・ミュージック。これはまるで魔法の音楽。古いアイリッシュの特徴を外人目線の「面白い」感覚でとらえ、その部分を楽しんで演奏する･･･。その結果のまるで古いアイリッシュのつぼを得た演奏に、心は笑顔笑顔。忘れた頃に聞こえてくるボーンズのおどけた音も楽しい。ゲスト:Johnny"Ringo"McDonagh。2008 作。Great Danes)

*MAIRE NI CHEILEACHAIR:Ceantar Glas Mhúscraí D

(2018 年 11 月に開かれたオリアダ杯で優勝したコークの女性シャンノース・シンガーの二枚組。一枚目はコークの Mhúscraí というゲール語使用地域に関連したシャンノース・ソングを含む選曲で、二枚目は英語によるもの。今最も輝いているシンガー。2018 作。PORCD024)

*CUIG:The Theory Of Chaos C

(2013 年結成の五太郎の若きアイリッシュ・バンド"Cúig"の新作で二枚目。メムバーは Miceal Mullen{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ},Rónán Stewart{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ、ｳﾞｫｰｶﾙ},Ruairí Stewart{ｷﾞﾀｰ},Eoin Murphy{ｱｺ}、Cathal Murphy{ﾄﾞﾗﾑｽ、ｳﾞｫｰｶﾙ他}。Irish American

News で"Best New Irish Band 2016"に選ばれたという彼らの音楽は、様々なタイプのアイリッシュのノリが重なり合ったチャレンジ精神旺盛なアイリッシュ・フォーク＆トラッド。同じタイプのバンドはちょっと思いつかない。かと言って異色な感じがしないのは、音楽そのものも、そして音楽する心もアイリッシュしているからだろう。音楽が若者らしく清々しい。2018 作。Cúig)

*DAITHI GORMLEY:Fiddling Without A Bow C

(副題"Irish Traditional Music on Button Accordion"。Joe Burke が"Master musician"と呼ぶスライゴーのボタン・アコーディオン奏者の Daithí Gormley のデビュー作。Catherine McHugh のピアノとの共演による Daithíの本作は、スライゴーのお年寄りも歓喜するスライゴーのトラッド色濃厚なアイリッシュ。Daithíにアコを教えたことのある P.J. Heron は"Brilliant playing"と賛辞し「いつかフィドルとの共演盤が聴きたいね」と。2018 作。Daithí Gormley)

*PETER BROWNE:Sidewinder ¥2390

(1953 年ダブリン生まれで 6 歳から演奏をしているという超ヴェテラン・アイリッシュ・ボタン・アコーディオン奏者 Peter Browne のソロ。空前絶後。2018 作。Peter Browne)

*TOMMY PEOPLES
:Traditional Irish Music On The Fiddle ¥2390

(1985 年に GTD からカセットで発売され、1993 年に CD 化されて廃盤のなっていた T.Peoples の直球アイリッシュ・フィドル・アルバムが新たな意匠で再発。Eugene Kelly がピアノとギターで共演。全 12 トラックの全 20 曲。1985 年/2018 再発。Trad Ireland)

[CD/ＵＳＡ{ﾄﾗｯﾄﾞ、ｱﾊﾟﾗﾁｱﾝ他}]



(Our Native Daughters)

*OUR NATIVE DAUGHTERS:Songs Of Our Native Daughters A

(「文化の多様・相違性、教育、世界の"音"に対する理解の向上、文化的遺産・伝統への従事」を使命と掲げる Smithsonian Folkways Recordings 社の使命を力強く音楽作品として表現した Rhiannon Giddens, Amythyst Kiah, Leyla McCalla, Allison Russell のアフリカ系米国人歌姫達によるパワフルな新作。17 世紀から 19 世紀のアフリカ系米国人が体験した苦難や希望の物語に光りを当てたもので、各歌姫のヴォーカルは力強く美しい上に、米国黒人系フォーク/ブルースからカリブ音楽にまで至る音楽は、広い意味での「フォーク」の視点から多様な音楽性に彩られていて、滅茶苦茶素晴らしい。今の時代だからこそパワーを持つ価値ある音楽だ。プロデュースは Rhiannon Giddens と Dirk Powell。Dirk Powell の豊かな音楽経験が功を奏していると思うことしきり。P36 のブックレット付。2019 作。Smithsonian Folkways Recordings)

*THE OTHER YEARS:The Other Years　A
（fROOTS 誌の一押しの CD レビューで知って聴いたら、当たり！The Other Years は Anna Krippenstapel と Heather Summers の誕生日が三日違いの女性二人組。Anna は SSW の Joan Shelley のフィドル奏者。二人ともにシンガーで、伴奏楽器はフィドルとバンジョーとギター。彼女達の音楽は Jean Ritchie や Hazel Dickens を思い出させるアパラチア民謡やオールドタイム・ミュージック。「当たり！」の音楽だが、フィドルやバンジョーの音色は渋々な上に二人のシンギングはゆるい。Michael Hurley の"Wildegeeses"をうたているが、Michael Hurley の音楽に通じるのんきさやもの哀しさやユーモアの感覚が感じられて、泣けるほどに愛おしいお宝音楽。2018 作。No Quarter）
*JEFF WARNER:Roam The Country Through　B
（フォークソング収集家でフォーク・シンガーの Anne & Frank Warner 夫妻の息子 Jeff Warner のソロ。曲目は両親から学んだ唄もあれば、両親が出逢ったシンガーから教わった唄もあれば、また古いレコーディングから覚えた唄など様々だが、Jeff のスタイルは聴き覚えた米国の古謡に忠実なスタイルで、ギターやバンジョーやコンサーティーナを奏でながらうたう唄は、そのまま米国古謡の素朴な味わいに充ちていて、うっすら英国古謡の世界へとつながる味わいの唄もある。それもその筈？Pete Coe の音楽パートナーで英国のトラッド・シンガーの Alice Jones が大半の曲でヴォーカル・ハーモニーとホイッスルなどの演奏で共演している。全 17 曲。WildGoose）

［CD/ＬＡＰＬＡＮＤ］



（Áššu）

*ASSU:Assu　B
（Áššu はサーミの伝統的なヨイク・シンガーの Ulla Pirttijärvi のシンギングをフィーチャーした三人組。かれこれ数十年、様々なヨイクを聴いてきたが、この Ulla というシンガーがうたうヨイクの濃さは、並外れている。霊的というか節回しには聖と俗が混ざり合って至芸の域。素晴らしいのは彼女のシンギングのみならず、彼女のヨイクにインスパイヤーされて共演者になったという各種ギターの Olav Torget と各種打楽器の Harald Skullerud の演奏のエスニックさとその即興的音楽の精神性の高さ。彼ら本来の音楽性は西アフリカ音楽だが、二人は Ulla の高潔な唄と出逢ったことで、西アフリカ音楽から学んだ演奏技術と感性をフルに発揮して独自のヨイクの音楽へと深化させ、類い稀なヨイク音楽へとレベルアップしている。すべてが冴え渡っている。2019 作。Bafe's Factory/Nordic Notes）

［CD/ＦＩＮＬＡＮＤ］

*PAIVI HIRVONEN:Alku - The Beginning　　B
(Okra Playground のシンガーでリラ奏者の Päivi Hirvonen のソロ。フィンランドのトラッドの土俗的な味わいを強く持った野性味あるシンギングと、同じく自身が奏でる野性味あるリラの演奏は、Okra Playground でぶっ飛んだのと同じくらいぶっ飛んでしまった。彼女がフィンランドのトラッドに傾ける情熱はもの凄い。フィンランドの民謡に宿る魂を感じ取り、全身全霊を傾けてシンギングし、リラをノイジーに、ときに稲妻のように、ときに妖精が踊るように奏でる。これまでに出逢ったフィンランドの女性シンガーでピカー。彼女歌の先生でもある。凄いシンガーが育ちそう。2018 作。Nordic Notes)

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]

*RØINE/WARG:Bibopalula　　B
(Daniel Sandén-Warg{ヴォーカル、ランゲレイク、口琴他}と Sudan Dudan の Anders Erik Røine{ニッケルハルパの前身のモラハルパ、各種フィドル、口琴、ヴォーカル他}の二人組による本作は、Hedningarna を初めて聴いたときに似たトキメキ。民俗楽器をかき鳴らし、Daniel のヴォーカルもサウンドも異世界からの声や音楽ののような土俗的で不思議な音楽を創作する。Garmarna やその後の Hedningarna の完成された北欧トラッドのコアの音楽とも言える原初的トラッドは、魂を揺さぶる。2018 作。Ta:lik)

*MATTISGARD & RØINE:Sudan Dudan　　B
(Marit Mattisgard{今の姓は Karlberg}と Anders Erik Røine の Sudan Dudan のデビュー作。当時もしびれたが、今も同じ。もう既に独自の北欧風フォーク＆ブルースの味わいを煎じ出していて、素晴らしい。タイプライターで打って作ったブックレットの文字が読みづらいのだけが問題。2006 作。Ta:lik)

[CD/ＬＡＴＶＩＡ]



(Namejs Kalnins)　(Rahu The Fool)

*NAMEJS KALNINS:Laika gaitā　　B
(ラトヴィアのカンテレ系民族楽器の Kokle{クークル}の演奏家の Namejs Kalnins のソロ。Namejs 君はまだ 15 歳。クークル歴は５年という。二人の師匠がクークルの美しいサウンドの世界に導いてくれたという。彼の水面に映る木漏れ日のキラキラ感までをも表現したかのような演奏は細やかで、まるで日の光や森の妖精が舞い踊っているかのように感じられる音楽。そしてその音楽は厳かな気品をも感じられるもの。おそらく彼の心はいにしえのラトヴィア人の魂や森の精と繋がっているいるのだろう。こう言う音楽は、ともすると感性に流されやすいが、音楽に伝統的な響きが残されているのは、師匠の指導の賜物か。いつまで聴いていても飽きが来ない。2018 作。Lauska)

*RAHU THE FOOL:Rahu The Fool ¥2590
(豪華 CD ブック形ケース仕様の二枚組。「祖父達の愛と戦いと海と牧草地の物語にインスパイヤーされたフォーク」という二姫三太郎の五人組の Rahu The Fool の音楽はユニーク。ウォッシュボード、ダブルベース、ギター、フィドル、フルートから奏でられる音楽は、米国のジャグバンドや古臭いブルースやジャズやカントリーと東欧風{ラトヴィア風？}のフォークとが混ざり合った異種交配サウンドで、ヴォーカルはウクライナの Uklainians やロシア民謡のような感じもある。古き良き米国音楽に親しんだ連中がラトヴィアの民俗音楽を自を出して演唱した音楽のようにに聞こえる。初体験のフォーク・ミュージックだ。1970 年代風の写真集入。二枚のディスクの下は昔のヌード写真。2019 作。Rahu The Fool)

[CD/BELGIUM,FLANDERS]
*THE HELEN FLAHERTY BAND:Gazing At The Moon B
(元 Shantalla のヴォーカルで屈指のスコットランド人トラッド・シンガーの Helen Flaherty のケルティック・バンドのデビュー作。Helen のシンギングと Philip Masure のギター＆シターンの妙技を要に、フィドルとフルートがケルティックな芳香を添えるという音楽創りが成されていて、Helen のたおやかなシンギングは、優艶で実に味わい深い。タイトルではないが、「お月見」で夢うつつ気分。2018 作。Appel)

[CD/ＧＡＬＩＣＩＡ]
*CANTIGAS E AGARIMOS:O Corazon Aberto B
(タムバリンの一種のパンデレータにパーカッション、ガイタ、アコーディオンなどの音楽と男女の合唱によるガリシアの民俗音楽だが、前回販売したガリシア南部の女性ヴォーカル・トリオ"Tanxedoras"の音楽をさらに幅を広げた音楽で、ガリシアの民衆音楽の素晴らしさが詰まっている。グループにはダンサーもいるようで、音楽にはダンスの空気感がみなぎっている。他の地域のケルト音楽グループの影響を受けた Milladoiro のようなガリシアン・バンドとは味わいを異にした土俗色濃厚な素晴らしい音楽。ガリシア音楽の底力みなぎる快作。2018 作。Inquedanzas Son)

[CD/ＩＴＡＬＹ]
*BALARÙ:Gravure B
(Balarù{ダンスを愛する人々の意}は Francesco Cavallero{ﾊｰﾃﾞｨｶﾞｰﾃﾞｨ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Andrea Lopomo{ﾌﾞｽﾞｰｷ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Ilario Olivetti{ｺﾙﾇﾐｭｰｽﾞ、ｸﾗﾘﾈｯﾄ、ﾌﾙｰﾄ他}, Andrea Beltrando{ｱｺ}の北イタリアはピエモンテの四人組トラッド・バンド。かつてピエモンテからは数々の素晴らしいトラッド・バンドが産声を上げたが、いつしか姿を消していった。本作は、時は過ぎて、ピエモンテの伝統音楽の魅力に取り憑かれた若者四人が独自にリサーチして創作したピエモンテのトラッドで、20 世紀後半にピエモンテのトラッドを復活させた先輩達の音楽も参考にしたであろう彼らのトラッドは、各種楽器の演奏力と表現力が充実した上に、活き活きしていてすこぶる瑞々しい。彼らのピエモンテの伝統音楽に注ぐ愛情が音楽にばっちり表れていて、心底感動。

2018 作。Felmay)

[CD/ＳＡＲＤＩＮＩＡ]

*ELENA LEDDA:Làntias B

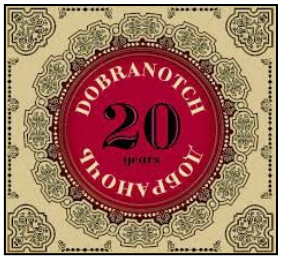
(サルディーニャの歌姫の Elena Ledda の 15 枚目。80 年代に出逢って、サルディーニャの伝統音楽に根ざした地中海の香りを含んだ彼女のエキゾティックでエレガントな音楽の虜になってしまったが、あれから 30 年あまり経っても、サルディーニャの伝統音楽に根ざした彼女の地中海風味のエキゾティックでエレガントなシンギングと音楽は不変。例えば Loreena McKennitt のような夢想的なムードが漂っていて、ある種桃源郷のような境地にも感じられる音楽だ。2017 作。Sard)

[CD/ＰＯＬＡＮＤ]

*WARSAW VILLAGE BAND:Masovian Roots Re:action C

(現在東西ヨーロッパのトラッド･バンドで最も勢いのあるトラッド･バンドの Warsaw Village Band の八枚目。トラッドに挑む志の高さと豊かで幅の広い民俗音楽性は、かつてのハンガリーの Kolinda やフィンランドの Värttinäクラス。本作はポーランド中東部のマゾフシェ県のフォーク･ミュージックにスポットを当てたアルバムで、彼ら独特な異種交配的で野趣なスタイルを保持しつつ、かつてなく土地の伝統音楽に根ざした「フォーク･ミュージック」の香りを放つ音楽になっている。彼らの手にかかれば、どんな民謡も音楽も誇り高い東欧トラッド～ワールドミュージックに生まれ変わる。滅茶苦茶凄い。2018 作。Jaro)

[CD/KLEZMER, GYPSY, BALKAN 他]



(Dobranotch)

*DOBRANOTCH:20 Years B

(ロシア人演奏家がフランスでユダヤ･ジプシー･バルカン･バンド"Dobranotch"を結成したのが 1998 年。音楽の旅を続けた彼らは、故郷ロシアに帰って、メムバーを補強し、ニューサウンドを追求したのが本作。ブラスを伴った七人編成バンドが体現する異種交配的でエキゾティックなユダヤ･ジプシー･バルカン･サウンドは、正にお祭り音楽で圧巻。そして多様なサウンドで躍動する音楽は、Mitia Khramtsov の役者なヴォーカルとともに婚礼など祝宴気分。この手の音楽の最前線の音楽。2017 年、ドイツで唯一のフォーク部門の賞の"Eiserner Eversteiner"を受賞。2019 作。CPL Music)

[CD/ＭＡＬＩ]

*BASSEKOU KOUYATE & NGONI BA:Miri C

(マリのンゴーニ奏者の Bassekou Kouyate と自身のバンド"Ngoni Ba"の新譜。ボトルネック奏法を取り入れた Bassekou のンゴーニ

の演奏は、西アフリカのコラの一流奏者の演奏に引けをとらず魅力的だが、本作は多数のゲスト・シンガーや演奏家を招いたホーム・セッションのような音楽。多数の招待客を迎えていながら、終始彼らの音楽が薄められることなく、むしろ深く民俗音楽色が表出しているのは、驚かされる。招待客の中には Bela Fleck や Carolina Chocolate Drops の Dom Flemons やモロッコの Majid Bekkas やキューバの Madera Limpia も。素晴らしい音楽は人を呼ぶ。2019 作。Outhere）

（あとがき）

*冒頭にも書きましたが、先月からバタバタしていて、バタバタしている内に、いつのまにか春うららな季節になっていたという感じです。どうにかカタログを発行できて、ほっとしています。

*Flook の新譜、Sian James の新譜、Liz Carroll & Jake Charron の新譜、Julie July Band の Sandy Denny ソング集に、「お久し振り！」のヴェテランＳＳＷのお二方 George Ensle と Pierce Pettis の新譜等々、色々良いのが発売されますね。

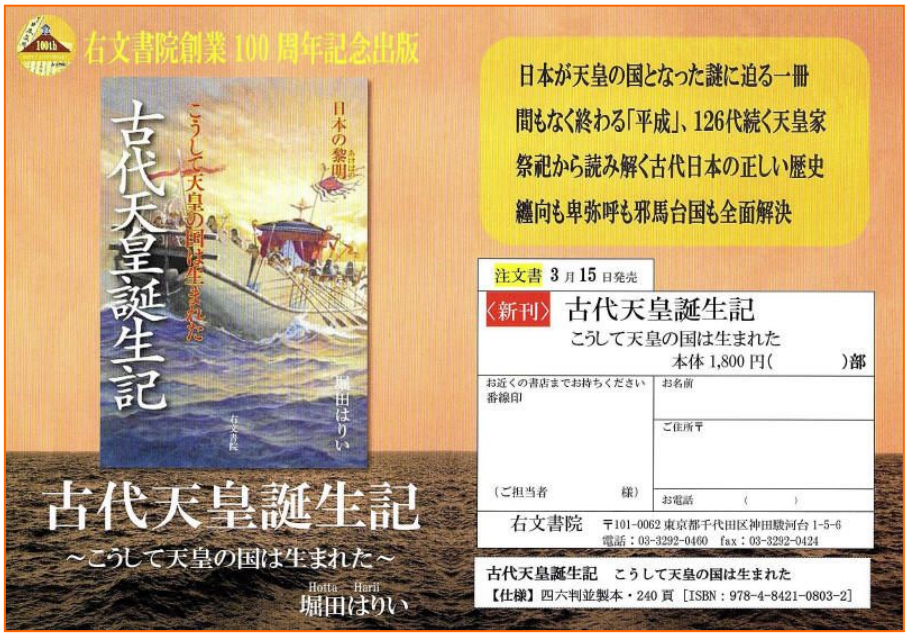
*音楽の本ではなくて申し訳ありませんが、新元号・新天皇即位を機に是非『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』をご一読願えればと思っています。ＮＨＫのラジオ番組でパーソナリティーをしている友人が本に書いたことをＮＨＫの「歴史ヒストリア」で取り上げるよう推薦してくれています。果たしてどうなることやら。

*４月１３日～１５日の間、所用で外出するため発送業務を休みます。

*では、ご注文をお待ちしています。（船津潔＆堀田はりい）

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

好評発売中



堀田はりい著『古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた』
四六判２４０ページ。　税抜き定価１８００円

《序章》より

本書は、日本人のだれもが初体験する卑弥呼の時代から纒向で天皇を中心とした日本の国の原形が創られるまでの、歴史を逆コースでたどる『古代天皇誕生記』です。

終章では、『魏志倭人伝』が「地理」「現代社会」と「歴史」とに分けて書かれていることを発見し、卑弥呼の女王国と卑弥呼の墓と邪馬台国の場所を特定しました。

